

「分析支援プログラム」を活用した効果的な取組事例

校種	中学校		【行田市教育委員会】
<1 現状と課題> <p>本校の生徒は明るく素直で、互いに協力し合って取り組もうとする姿勢があり、落ち着いた学校生活を送っている。しかし、ほとんどの生徒が同じ小学校から進学してくるという、競争のないのんびりとした環境のなかで生活しているため、積極的に学習する生徒が少ない。県の学習状況調査（数学）においては、数学の基礎知識や「数と式」の正答率が県平均と比べて特に低い。</p> <p>この課題解決のため「分析支援プログラム」を活用し、一人一人の生徒の学習習慣の確立と基礎学力の定着、生徒の興味関心を持たせる授業展開や指導法の工夫改善に取り組んでいる。</p>			
<2 取組の概要>			
(1) 少人数指導やTT指導による授業			
1 学年では基礎の定着を図るため、クラスを2つに分ける少人数指導を毎時間実施。 3 学年では1, 2 学年の復習も出来るよう週2時間のTT指導を行った。			
(2) 小テスト・朝自習ドリル			
学習内容の確実な習得のため、こまめな小テストや基礎計算の確認ドリルを授業に位置づけて実施。また、既習事項の定着を図るため、朝の時間（10分間）に5教科の朝自習ドリルを実施した。さらに月に1回は確認テストを実施した。			
(3) 学習の手引きの作成			
授業の受け方や家庭学習の仕方を分かりやすく説明した「学習の手引き」を作成した。			
(4) 家庭学習の奨励			
毎時間計算力を向上させるためのプリントを配布し、家に持ち帰って復習することで家庭学習を奨励した。			
(5) 補充学習の実施			
定期テスト前の放課後や長期休業を利用して、数学の苦手な生徒を中心に補充学習会を開催した。			
<3 成果>			
少人数指導やTT指導によって、生徒一人一人に目が行き届くようになり、つまずきの実態や原因、学習到達度の確認ができ、個に応じた指導が可能になった。また、生徒の発表や質問の機会が増え、やる気をもって授業に臨む生徒が増えている。小テストやドリルを繰り返すことで基礎が定着し、数学に苦手意識を持つ生徒が減少した。			
『分析支援プログラム』によれば、「数学の知識理解」と質問紙調査の「授業で分からないことを先生にたずねる」、「家庭での勉強時間」に関連性がみられた。少人数指導によるきめ細やかな指導と補充学習、家庭学習の手引きの活用や宿題を課すことで、基礎学力の育成につながっていると考える。			

